

劣性の思想：安部公房『カンガルー・ノート』論

中野，和典
筑紫女学園中学・高等学校教諭

<https://doi.org/10.15017/11027>

出版情報：九大日文．9，pp.82-98，2007-03-31．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

劣性の思想

——安部公房『カンガルー・ノート』論——

NAKANO
中野 和典
KANONDI

序

劣性は潜在的である。メンデル遺伝学によれば、対立遺伝子が優性のホモ接合体(AA)の場合には優性形質(A)が発現し、異なるヘテロ接合体(Aa)の場合もやはり優性形質(A)が発現する。劣性のホモ接合体(aa)でない限り劣性形質(a)は発現しないわけだが、発現しないからといって劣性の因子が消失するのではない。劣性のものは潜在化する。

この優性/劣性の概念は、ダーウィン進化論にも接続されて生存競争、適者生存、自然淘汰といったモデルに遺伝子という生得的な要因が働いていることを裏付けるものとしても受容されるようになったものだが^①、安部公房はこの優性/劣性の概念に刺激されて、独特の思想を打ち立てていた。それは優等のものとなさされがちな優性のホモ接合体ではなく、ヘテロ接合体の方に新しい可能性を見いだしていく、という思想である。安部は一九六四年に発表したエッセイ「ヘテロの構造」で次のように述べている。^②

メタヴオアの「人間の未来」という本によると、遺伝のしかたには、ホモとヘテロの二つの型があり、一般的通念に反して、ホモよりもヘテロの方が、進化論的に優れた適合性を示すものだという。(略)通念からすれば、劣悪者を除去して、遺伝因子をホモ化することが、たとえば家畜の品種改良をすすめる上で最良の方法のように思われるのだが、事實はまったくその反対で、現にホモ化しやすい貴族の家系などは、ごく短期間のうちに、あっさりとその血統を絶やしてしまうものらしい。つまり、集団の優勢は、安定した均一性によつて保障されたりするものではなく、むしろ標準から逸脱した《多様の少数》をその視野に広く含む、ヘテロの構造のほうにこそ、かえつて有利な条件が認められるというわけだ。

とすれば、民族の純血をうたったナチスの人種理論なども、けっきよくは自らの手で自らを亡ぼすだけの理論にしかすぎなかつたのではあるまいか。仮に彼等が、軍事的に勝利をおさめていたとしても、いずれは自らの理論によつて、息の根をとめられるだけのことだつたかもしれぬ。頑固なナシヨナリストたちが、いかに大声で民族の純化を叫ぼうとも、現実の尺度はあくまでもヘテロの優位を主張しつつけて、決してゆずつたりはしないものらしいのである。

安部は、ホモ接合体に比べてヘテロ接合体の方が適合性が高いという学説を紹介した上で^③、それを人種主義や優性思想に接

続きさせて、ナチスドイツの敗北の必然性について論じている。ナチスドイツが行なった民族の優性ホモ化をめざすような人種政策は、国家としての勢力を弱体化させるようにしか働かなかつたはずだ、というわけである。さらに安部は、ホモ／ヘテロの概念をより広い領域に演繹して思考を展開する。

ところで、この考え方を、文化や思想の領域にあてはめてみたら何うだろう。生物学的な進化までは、通念に反してヘテロの優位を認めることが出来たものの、こと精神の進化に関しては、そうおいそれとは受入れがたい。やはり、通念に従って、ヘテロ型の雑種文化によりは、単一の指導理念で統一されたホモ型文化のほうに、誰しも軍配をあげたくなるのではあるまいか。(略)たとえ、エゴイズムという精神のアレルギー症状をおこそうとも、孤独という拒絶の病におかされようとも、集団としては、そうした個の病によって、かえって健康を保持しているのかもしれないのだ。いや、それを病気だと考えることが、そもそもホモ的偏見なのかもしれない。そうした混乱は、必要悪という以上に、むしろ未来を約束された社会の本来のありかたかもしれないのである。現代の危険や困難は、ますます拡大していくヘテロ的部分などにあるのではなく、それを直視しえずに、むやみと全体との融合をあせる、ホモ的衝動のほうにこそあるのではあるまいか。

文化や思想の領域においても、やはりヘテロ型の方により大きな価値を認めるべきであると安部は言う。ここに言うヘテロ型の文化・思想とは、非伝統、不調和、個別化を特徴とする雑種の文化・思想である。ヘテロ型の文化・思想は乱雑さや孤立感を免れ得ないが、それを集団の必要悪という消極的な要素と見るのではなく、そこにこそ危機や困難を乗り越えていく可能性があるのだという。

このようなホモ／ヘテロの概念に基づく思考は、安部の晩年まで続けられた。安部は一九八六年のインタビュー「ヘテロ精神の復権」でもヘテロ型の文化・思想という観点から次のように発言している⁴⁾。

これは生物学的次元の話だけど、人間を含むすべての生物集団にはホモ化とヘテロ化という二つのメカニズムがあることが知られている。人間の場合、このメカニズムは言語の中に存在し、言語を通して立ち現れてくる。言語が遺伝子レベルに基礎を持ち、しかも動物の閉じられた本能的プログラムに代わる、開かれた高次のプログラムだからです。言語はここで創造的な分化の機能も持った。

このホモ化とヘテロ化の現れは、儀式を例にとるとわかりやすい。前者は儀式をつかさどるシャーマンが呪術で呼び寄せようとする凝縮化のメカニズムであり、後者はその儀式に反発し、呪術から逃れようとする拡散化のメカニズム。どちらも人間にとって根源的な衝動でもあるんだな。

一九六四年の「ヘテロの構造」と異なるのは、ホモ／ヘテロの概念が、ここでは言語の機能に接続されている点である。安部は言語を第二信号系とするパヴロフの学説に発想を得、その後ローレンツの動物行動学、チョムスキーの生成文法、そしてピツカートンのクレオール研究を取り入れた結果、言語を人間の遺伝子に刻まれた生得的なプログラムと考えるようになっていた⁵⁾。ホモ／ヘテロの概念が遺伝子だけではなく、言語に結びつけられているのは、そのためである。このような相違は見られるが、晩年までの安部の思想においてホモ／ヘテロの概念が重要な思考の枠組みになっていたことは確かである。

なぜ、安部の物語では劣性のもに繰り返し焦点が当てられるのか⁶⁾。この問題を検討する上でホモ／ヘテロの視点は有効だろう。劣性のもは優性のもによって隠蔽されるか、優性のもとの優位を補強するために下等のもとして表象される。それとは異なる方法で劣性のもを表象すること。劣性と優性との関係を組み換えてみせること。潜在化していた劣性のもを顕在化し、新たなヘテロの世界を構築してみせること。ここに劣性のもを焦点化し続けることの意味があったのではないか。

安部が書いた最後の長編、『カンガルー・ノート』（「新潮」一九九一年一月―七月⁷⁾）は、それまでの安部公房作品のさまざまなイメージを取り入れつつ、劣性の群像を描き出している。本論の目的は、その劣性の群像の関係をとらえ、結末に訪れる物語

の循環停止の意味を明らかにすることである。

一 劣性の群像

『カンガルー・ノート』は、カンガルーに代表される劣性のもたちについての記録⁸⁾である。「カンガルー・ノート」という名称は、文房具会社に務めている主人公「ぼく」が提案した新製品につけられたものである。その命名の理由を説明する中で「ぼく」は有袋類について次のように語る。

有袋類って、観察すればするほどみじめなんです。ご存じとは思いますが、真獣類も有袋類も、鏡に映したみたい
にそれぞれに対応する進化の枝をもっていますね。ネコと
フクロネコ、ハイエナとタスマニア・デビル、オオカミと
フクロ・オオカミ、クマとコアラ、ウサギとフクロウサギ
……（略）たとえば動物園で、なぜコアラに人気があつま
るのか……（略）リスの背の縞模様、けっこう明瞭なうえ
に、ちゃんと個体差が識別されます。でもフクロリスの縞
はぼやけていて、個体差もないにひとしい。それからフク
ロネズミ、動作もけっこう敏捷だけど、ほんものの鼠には
とうていかないけません。有袋類というのは、結局のところ、
真獣類の不器用な模倣じゃないんでしょうか。その不器用
さが、一種の愛敬になって、身につまされるといふか……

有袋類は、真獸類（有胎盤類）との対比において、常に真獸類の優等性を説明する下等の生物として語られてきた⁽⁹⁾。個体差が希薄で、類としての多様性も真獸類に劣る有袋類は、環境への適応力においても弱者であり、劣等の類として生物学的に位置づけられてきた⁽¹⁰⁾。そして、有袋類を劣等とみなす眼差しは、「新世界」オーストラリアに住む原住民を劣等の人種と見なし、植民地支配を正当化する眼差しに類似するものである⁽¹¹⁾。カンガルーの表象は、有袋類の代表としてだけではなく、植民地オーストラリアの指標として、劣等のものへの眼差しの問題を浮かび上がらせているのである。

そのようなカンガルーに対する「ぼく」の眼差しは、優性のものが劣性のものに向けるものとは異なる。「ぼく」は有袋類が人気を集める理由を、その不完全さゆえの愛敬によるものと分析し、身につまされるのだと言う。「ぼく」の眼差しは、カンガルーに対する共感に満ちている。それは「ぼく」自身が劣性のものであるという自覚があったからだろう。脛にかいわれ大根が群生し始めるという奇病の発症は、「ぼく」自身が抱き続けてきた劣等感の表徴であった。

「だいたい、これが本物の『かいわれ大根』かどうかを問題にする前に、そもそも『かいわれ大根』とは何か、その疑問点から解明すべきじゃないでしょうか。（略）困ったことに、試験場で試験したかぎりでは、いくら手間暇かけて

も大根にはなつてくれないんだ。土に移植したとたん、へなへなと腐つてしまう。あれはいつたい、何なんだろうね？」

「あんが植物の有袋類みたいなものじゃないんですか？」
(一)

かいわれ大根は大根の新芽であるから、大根とかいわれ大根との間に生物学的な優劣の差はない。ただし、かいわれ大根は「間引き菜」であり、成長した大根に対比して環境への適応力は低い。「カンガルー・ノート」においては、大根に対するかいわれ大根の「未熟さ」のイメージが、真獸類に対する有袋類の進化の「未熟さ」のイメージに重ねられ、大根には優性の、かいわれ大根には劣性のイメージが付されている。そして、かいわれ大根を脛に群生させた「ぼく」も、脛のかいわれ大根を意識する度に、自分が劣性のものであるということを繰り返して確認し続けることになる。

奇病の診療のため病院を訪れた「ぼく」が医療用ベッドに乗り、点滴と排尿用の袋につながれた有袋類として⁽¹²⁾、一つのイメージの世界から別のイメージの世界へ跳躍する様は、カンガルーの姿に重なる⁽¹³⁾。「ぼく」とカンガルーとは、劣性という紐帯で結ばれているのである。

カンガルーだけでなく、「ぼく」が遭遇する人々はそれぞれに劣性のイメージを負っている。第二節で語られる「緑面の詩人」は、自分の劣等感を裏返したような自己解説を書いている。

「緑面の詩人」こと鰯魚飛魚は、「ぼく」の父親が遺した怪奇小説『大黒屋爆破事件』の作者である。この怪奇小説には作者の親友による解説が書かれているが、その内容は次のようなものであった。

わが「緑面の詩人」にも、彼なりの悩みがあったのです。

第一に彼は、慢性の胆嚢炎を患っていた。すべての女性が憧れの的にしていた、あの緑面は、べつに神秘の啓示でもなんでもなく、ただの胆汗逆流による病状にすぎなかったのです。

(二)

「ぼく」は小説の作者と解説者が、実は同一人物であったのではないかという疑念を抱く。「緑色の顔の男」って、本当に女にもてるんだらうか？(二)という「ぼく」の疑念は、作者と解説者を同一人物と考えない限り解消されない。作者と解説者が同一人物であるとすれば、解説における「緑面の詩人」への讃辞は、胆嚢炎による緑面が理由で女性から拒絶される男が、自分の劣等感の裏返しとして書いたものである、ということになる。「脛は緑に覆われているが、あいにくぼくは緑面でもなければ、詩人でもない」(二)という言葉に表われているように、緑のイメージによって「緑面の詩人」のイメージが「ぼく」に重なる。ここでも両者をつないでいるのは、劣性という属性である。

この緑のイメージは、第三節で語られる賽の河原の小鬼(み

どり)たちにも重なる。この小鬼たちは、市営温泉会館付属保育園の園児たちによって、園の経営資金を得るために演じられているものである。「全国百六十四箇所もの賽の河原の中で、実際に石積み(4)の光景を拝めますのは、この河原だけなのでございます」(三)というアナウンスで始まる賽の河原ショーは「なんとなく盛り場の終業時間の路地裏を思いだしていた」(三)という「ぼく」の印象に表れているとおり、全く商業化されている。この小鬼たちの姿はカンガルーにも重ねられる。

いきなり観光客めがけて突進する小鬼たち。伸びたランニングの裾を持ち上げ、カンガルー風の袋にして、老人たちに迫っていく。

オタスケ オタスケ オタスケヨ

オネガイダカラ タスケテヨ

「いくらなんでも、脅迫してみる」

「市の財政だけで、保育園の経営なんて出来っこないですよ」
よう」 (三)

なぜ、ここまで商業化されていてもお、老人たちは小鬼たちの姿に涙するのか。それは小鬼たちが無垢の幼子であるにもかかわらず、地獄で責苦を受けているという哀れを誘う構図が、老人たちを標的として巧妙に演出されているからである。斉藤研一『子どもの中世史』によれば、賽の河原には他の地獄と異なる特質がある。第一に境界性。画や物語に描かれる賽の河原

は地獄の周縁部に位置しており、地獄の内側でもあり外側でもあるという両義的な場になっている⁽¹⁵⁾。第二に対象者。賽の河原に墮とされるのは水子（流産した胎児）を含む幼子だけである。

第三に罪状。幼子が賽の河原に墮とされる理由は、親に先立つて夭折したことにある。ただし、幼くして死ぬこと自体の責任を幼子に負わせることはできない。特に人間としての存在を与えられていない水子を責任の主体と見なすことはできない。したがって、ここが重要な点だが、他の地獄が責苦を受ける主体とその地獄の様子を画や物語を通じて観る主体とが同一であるのに対して、賽の河原は責苦を受ける主体（幼子）とそれを観る者（成人）とが異なるという特質を持っている。つまり賽の河原は、幼子を戒めるための地獄ではなく、夭折した幼子の供養を怠らないよう成人を戒めるために描かれた地獄なのである⁽¹⁶⁾。

ただし『カンガルー・ノート』においては、この成人の位置を占めているのが老人たちである点が旧来の賽の河原とは異なる。「優生保護法」（一九四八年成立、一九九六年に「母体保護法」改正）の例にも表れている通り、成人に対比して幼子は劣性に位置づけられている。成人に対する幼子（水子）の劣性という関係は、大根に対するかいわれ大根（間引き菜）の劣性というイメージの重なりにも重なる。しかし、賽の河原ショーを取り仕切っているのが市の職員であることを考えれば、劣性の位置に置かれているのはむしろ寄付金をたかられる老人たちの方であるとも言える。『カンガルー・ノート』の賽の河原は、優

性のもの（市の職員）が、劣性のもの（幼子）を見世物にして劣性のもの（老人）から資金を搾取する場を描き出しているのである。

さらに、老人と地獄のイメージは第四節の「眼裂そのものの痕跡もない」という「ぼく」の老母の姿に重なる。また、第六節の「ベッドという鋳型で鋳造されて、かろうじて人間の形を維持している欠陥商品にすぎない」と語られる患者たちによって安楽死させられる老人の姿にも重なる。このようにベッドに乗った「ぼく」の跳躍^{ジャンプ}によって遭遇する人々は、点描されながらも、互いにイメージを重ね合わせることによって劣性の群像としての様相を浮び上がらせているのである。

二 閉鎖生態系の誘惑

劣性の群像を列挙した上で考えたいのは、「ぼく」とそれらのものでどのような関係にあるのかということである。物語には、劣性のものたちが置かれる空間として、地下や病院や廃駅が描かれている。「ぼく」が劣性のものたちに遭遇することになるのも、そのような空間に追いやられたことに端を発する。

警官に「協調性はゼロ」（二）の烙印を押された「ぼく」はベッドごと地下に廃棄され、地下からデパートに上れば、口髭の店員に「事務所まで、同行ねがいますよ」（三）と声を掛けられ、市営温泉会館では小鬼担当の職員から「生活はすべて、自分のベッドだけで行うこと」（三）と行動範囲を制限される。劣性の

表徴を持つ「ぼく」が劣性のもたちの空間を抜け出した途端、「ぼく」は排除の対象にされてしまう。「脛に《かいわれ大根》を生やすと、こんな屈辱にも耐えなければならぬのだらうか」(二)と嘆く「ぼく」は、それでもかいわれ大根に積極的な意味を見出そうとする。

他人の目さえ気にしなければ、簡便至極な黄緑野菜の補給源だとも言える。貸借表が赤字になるか、黒字になるかは、専門家の手を借りなければ計算できないにしても、一方的な赤字ではありえない。向こうは僕の脛から、水分とリンパ液を吸収し、光合成で炭水化物を作り出す。それをぼくが食べてエネルギーにする。そのエネルギーが十分なら、一種の閉鎖生態系が成り立つわけだ。考えてみれば地球だって閉じた生態系じゃないか。ぼく自身が小さな地球になったと考えれば、そうめそめそすることもないわけだ。(三)

「ぼく」とかいわれ大根は互いに養分を補給し合いながら共生する閉鎖生態系を構築する可能性を持っている。その利点は、他者と没交渉でいられることにある。没交渉の世界には、優性も劣性もないのだ。脛にかいわれ大根が群生するという奇病は、劣性の位置に追いやられていた「ぼく」の願望の表徴でもあったのである。

しかし、自分を小さな地球と見なすという発想には限界があ

る。「他人の目さえ気にしなければ」という、その他人の目こそが「ぼく」にとつての最も重要な問題であつたからだ。

衛生博覧会の特別展示品、世界初の《かいわれ大根》病患者。硫黄泉どころか、ただ延々と遊園地を引き回され、最後は全身《かいわれ大根》の培養基になって…… (二)

《かいわれ大根》がさらに進攻をつづけ、膝のラインを突破して上半身を目指すようなことにでもなれば、閉鎖生態系もくそもない。全身緑に覆われてしまったら、遊園地の怪獣コーナーにでも雇ってもらうしかないじゃないか。(三)

脛の《かいわれ大根》が不治の病だと診断されたとしたら、はたして安楽死を選ぶだろうか。《かいわれ大根》を根絶できないだけなら、靴下かなにかでこまかしくもきく。しかし皮膚の苗床化が全身にひろがり、眼や鼻や耳や口など、さらには尿道や肛門を通じて体内にまで繁茂し、やがてはマリモのように植物の塊になってしまうのだとしたら……当然、安楽死しかない。自殺はむしろ人権だとみなすべきだろう。(六)

「衛生博覧会」や「遊園地の怪獣コーナー」で、好奇の目にさらされる自分を繰り返し想像して絶望するのは、「ぼく」が何

より他人の目を恐れているからである。かいわれ大根の群生が全身に広がり、「靴下かなにかでごまかし」がきかなくなったら、おぞましい怪物として奇異と嫌悪の眼差ししか向けられなくなるだろう。「ぼく」はそのような孤絶に耐えうる人間ではないし、怪物としての自分を容認できる人間でもない。かいわれ大根の苗床拡大の恐怖が暗示しているのは、他者の視線が介在することで生じる劣等感の深まりによって自分自身を否定してしまうことへの恐怖だと考えてよい。「ぼく」を苦しめるものは奇病そのものではなく、自分を劣性のもとと自覚することから生まれる孤独感だったのである。

そして、「ぼく」が劣性のものであるの孤独感を痛感するのは、垂れ眼の女A・B・Cに関わったときである。姉妹のようにも、同一人物のようにも語られる女A・B・Cは、時空を超えた形象によって、「ぼく」を閉鎖生態系に留めて置かない異性の原型を示している。

ややこしいから、符丁をふつておくことにしよう。

垂れ眼A……垂れ眼B……垂れ眼C……

説明するまでもなく、Aは最初に出会い、後でまた再会した泌尿器科の看護婦。Bはいましがた意識にのぼった、周遊電車ですれちがった少女。Cは当然賽の河原で歌っていた小鬼たちの一人である。どうしてもはらせない疑問。もしかしたら、あのA、B、Cは同一人物ではないかという疑惑。違った年代に姿をみせた同一人物なら、多少の相

違があつても不思議はない。(七)

女C(幼女)―女B(少女)―女A(成人)という三つの時点を呈しながら入れ替わりに登場する女たちを、「ぼく」は一貫して欲望し続ける。最年少の女Cに出会ったときにさえ「ぼく」は次のように考える。

脛に傷どころか、《かいわれ大根》を生やした身で、女の子に言い寄ったり出来るわけがないじゃないか。騒ぎを起こそうにも、もう手遅れだ。下がり目も、上がり目もなくもない、いつそ去勢手術を受けたいくらいだよ。(三)

奇病を抱えているという劣性の意識が異性との交渉の断念につながっている。遺伝性とされた病者や障害者への断種を想起させる去勢手術⁽⁷⁾を望むほど「ぼく」の劣等感は深刻である。「ぼく」が女を欲望するとき、最も強烈にかいわれ大根は他者との間にある障壁としてとらえられる。なぜ、「ぼく」は他の誰でもなく女との関係を望むのか。それは「ぼく」の欲求が単なる性愛ではなく、生殖に向っているからである。

二人の生殖器を隔てているものは、精神的な障壁だけ。しかも、とくに幅広とは言えないベッドの上である。このまま次の段階へ進んでも、べつに不自然はないだろう。

「《かいわれ大根》、どんな具合？」

「以前ほど水つぽくないみたい……」

「やはり、気持ち悪いかな？」

「差し当たり、性的関係は無理ね」

「なぜ？ 伝染はしないと思うよ」

(四)

単なる「性器」ではなく「生殖器」による関係が望まれていることに注目したい。生殖としての交合が意味するものは、遺伝子の受容である。「ぼく」は女によって異性として承認され、性淘汰⁽⁸⁾において勝利することを通じて劣性の意識から救われようとしたのである。しかし、女Aからは「性的関係は無理」とはつきりと拒絶される。「ぼく」はかいわれ大根への嫌悪感にその理由を求めるが、女Aにとってはそれだけが理由ではない。

「君、すごくいい人だと思うけど……ふつうなら、君くらいの年の男性と一緒にいると、もっと浮き浮きした気分になるはずなのに、なぜか駄目なんだ。期待感が湧いてこないというか……」

「《かいわれ大根》のせいかな？」

「それもあるけど……」

「いいんだよ、いずれは賽の河原に戻って、きみの妹の面倒でも見て暮らすさ」

(五)

「それもあるけど」という言葉に表れているとおり、女Aが「ぼ

く」を拒むのは、かいわれ大根の有無に関わらず異性としての価値を認めていないからである。「君の性別なんて、ナンセンスよ」(二)と断言する女Aにとっては、たとえ奇病に冒されていなくても「ぼく」は生殖の相手にはなりえない。ここで注目したいのは、「いいんだよ」と「ぼく」が女Aからの拒絶を受入れた後、「きみの妹の面倒でも見て暮らすさ」と女Cが女Aの代替者として短絡されている点である。「ぼく」は女Aによって果たされなかった劣等感からの解放を、女Cとの関わりにおいて果たそうとする。女Cが容易に女Aと置き換えられるのは、女Cが「知恵遅れ」の幼女であり、弱者であるからだろう。

このように「ぼく」は、劣性の者として排除されるとき、他者と没交渉でいられる閉鎖生態系に留まろうとするが、自らを劣性とみなす孤独感と女への欲望によって、そこに留まることは選ばない。「ぼく」が劣性の自覚から救われるために重要なのは生殖の相手であるがゆえに、女A(成人)からの拒絶は「ぼく」にとって挫折であるはずだったが、その挫折は女C(幼女)への欲望に置き換えられるのである。

三 物語の循環停止

女C(幼女)への欲望は、結末に描かれる女B(少女)への欲望につながる。女Bへの欲望も、女Aからの拒絶によって自覚された劣等感に基づいていると考えられる。「ぼく」は廃駅で女Bに出会い「合意の上の性交が許されるのは、何歳からだっ

け？」と考える。⁽⁹⁾「ぼく」が気にしているのは公法によって裁かれる罪だが、物語の結末で裁かれるのはそれによらない罪である。ベッドのスクラップ化によって「ぼく」の跳躍は終局を迎える。

徐行運転に入っていたし、重量差がありすぎるので、印象は予期したよりも穏やかだった。しかしベッドのパイプは無残にねじくれ、悲痛な叫びをあげながらみるみるスクラップ化してしまう。引き裂かれた魔法の絨毯。ついに物語の循環の停止だ。ここがぼくの終点になってしまうのだろうか。これまでは危機に瀕するたびに、ひとつの夢から別の夢へ、一気に移動するパイパス役を勤めてくれたのに……

(七)

ここで予感されているとおり、「ぼく」は廃駅で終点＝死を迎えることになる。しかもベッドが遊園地スタイルのミニ電車によつてスクラップ化されることに象徴されるように、幼子たちに処刑されるのである。なぜ、「ぼく」は処刑されなければならなかったのか。それは、「ぼく」が女Bに向けた欲望に密接に関係している。

「間に合ったね」(略)

「なんに間に合ったの？」(略)

「知らなかった？ サーカスがくるんだ……」

「サーカス？」

「人さらいも一緒だったさ」

「人さらい？」

「人さらいって、小父さんのことじゃないの？」

「まさか……」

「私が誰か、教えてくれることになっているの」

「ぼくだって、自分が誰か教えてほしいね」

(七)

女Bはサーカスと一緒にやってくる人さらいを探しており、⁽¹⁰⁾「ぼく」を人さらいと信じて語りかける。なぜ、女Bは自分が誰であるのかを人さらいに教えてもらわなければならないのか。

Aが行方不明になった妹と言っていたのは、この少女かも知れない。やたら、人さらいのことを気にしているのも、考えてみれば符合するようだ。この娘は人さらいを恐れたいない、むしろ待ちうけている。この化粧も、人さらいを誘惑するためのものだろうか。

(七)

女Bは自分が誰であるかをはっきりと自覚できないほど幼い頃にさらわれ、サーカスの座員になった経歴を持っているらしい。従って自分が誰であるかを知るためには、自分をさらった人間を探す必要があるのだ。ただし、女Bは単なるサーカスの元座員とは思われない側面を持っている。「ぼく」によってポルノ

写真のモデルではないかと疑われる女Bは、化粧も仕草も性的な挑発に満ちているのだ。「すべての動作が表情の子供っぽさ」と矛盾している(七)と「ぼく」が感想を述べるとおり、その性的魅力は成人男性の視線を想定したものになっている。女Bの手慣れた仕草は、成人男性との関わりが以前にもあったことを暗示する。女Bは人さらいについて次のように歌う。

むかし人さらいは／子供たちを探したが／すべての迷路に番号がふられ／子供の隠し場所がなくなつたので／いま人さらいは引退し／子供たちが人さらいを探して歩く／いまは子供たちが／人さらいを探している／／だれも人生のはじまりを憶えていない／だれも人生の終わりに／気付くことは出来ない／でも祭りははじまり／祭りは終わる／祭りは人生ではないし／人生は祭りではない／だから人さらいがやってくる／祭りがはじまるその日暮れ／人さらいがやってくる／(略)遅れてやつてきた人さらい／会えなかつた人さらい／わたしが愛した人さらい (七)

少女Bは人さらいを探しているが、もはや人さらいがいなくなつてしまつたので、会うことができない。だから祭りを演出し、人さらいを招き入れる必要がある。遊園地スタイルのミニ電車とサーカスはその祭りの道具立てだろう。廃駅には誰もおらず、音楽も流れていない。にも関わらず「ぼく」は女Bに合わせて拍手し、女Bの身体の振動をとおして音楽を聴くのだ。全ては

遅れてやつて来た人さらいとして「ぼく」を招き入れるために演出された祭りである。「ぼく」は元来人さらいではなかつたが、潜在的にはその願望を持つていた。

もし《かいわれ大根》の負い目がなかつたら、その場で彼女を抱き締めていたはずだ。なぜこんな孤独に耐えななきゃならないんだろう。こんなに素晴らしい微笑が溢れかけているというのに…… (七)

自分自身を劣性のものとして位置づけ、カンガルー(有袋類)にも共感の眼差しを向けてきた「ぼく」だが、より弱いものに欲望の眼差しを向けた瞬間にその関係は変容する。劣性の自覚ゆえに女C(幼女)と女B(少女)を欲望した「ぼく」は、新たな優劣の構造を作り出してしまふのである。カンガルーに擬せられた「ぼく」は自分の抱いた欲望の報いとして、ワラビー(小型カンガルー)に擬せられた小鬼たちと女Bによって処刑される。

僕の後姿が見えた。そのぼくも覗き穴から向こうをのぞいている。ひどく脅えているようだ。ぼくも負けずに脅えていた。怖かつた。 (七)

欲望の眼差しで女を見ていた「ぼく」が眼にするのは、死を予感して脅えている自分自身の姿である。発見された「ぼく」の死体が「脛にカミソリを当てたらしい傷痕が多数見られた」

(七)という有り様であるのは、小鬼たちによってかいわれ大根が切り取られたことを示しているのだろう。「ぼく」は奪わずして奪われたのである。

このように『カンガルー・ノート』は、劣性の群像を描き出した上で、その劣性の自覚がさらなる弱者への欲望につながり、新たに抑奪／被抑奪の関係を生み出してゆく構造を問題化している。そしてカンガルーを植民地主義の表象としてとらえるとき、劣性の自覚から閉鎖生態系を脱し、他の劣性をものを欲望する「ぼく」の姿は、鎖国を脱し、「脱亜論」的植民地主義を形成してきた「日本」の姿そのものであることがわかる。脅える自分の後ろ姿を覗き見た「ぼく」の脅えは、劣性のものと信じていた自分を、抑奪者として発見したときの脅えであるに違いない。

【注記】

1 メンデル自身が生得説や前成説に特別な関心を寄せていたのではなく、後にそれらの関心に応える学説としてメンデルの学説が受容されたのである。カンギレム『生命科学の歴史—イデオロギーと合理性』(杉山吉弘訳、二〇〇六年三月、法政大学出版局)によれば「メンデルは、遺伝的に伝達されるものの要素として、しかし伝達の要素的動因としてではなく、形質という概念を創出した。メンデルの形質は別のn個の形質と組み合わせられることができたし、また異なった世代を通じてそれが再出現する頻度を測定することができた。メンデルは、構造、受精、発達にたいしていかなる関心も示していなかった。メンデルにとつて雑種形成

は、一つの全体としての類型の恒常性あるいは非恒常性を確立する手段ではなく、それはそうした類型を解体する手段なのであり、きわめて多数の事例に働きかけるという条件で、分析の道具、すなわちもろもろの形質を解離する道具なのである。メンデルが雑種に関心をもつとしても、それはただ雑種形成にたいする関心の数世紀来の伝統と袂を分かつたためである。メンデルは性現象に関心をもっていないし、生得的なものと後天的なもの、前成説と後成説についての争いにも関心をもっていない、彼に関心があるのは、ただもろもろの組み合わせについての計算によって自分の仮説の帰結を検証することだけである」。

2 安部公房「ヘテロの構造」(『文学界』一九六四年六月)。のちに『砂漠の思想』(一九六五年一〇月、講談社)に収録。

3 ここで安部が紹介しているのはメダウオア『人間の未来』(梅田敏郎訳、一九六四年二月、みすず書房)によるものである。原本は一九五九年一月一日から六回、イギリス放送協会(BBC)から放送された一般向け講演をまとめて一九六〇年に出版されたもの(P.B. Medawar: The Future of Man)である。メダウオアは講演当時パーミンガム大学の動物学教授であり、一九六〇年にノーベル医学生理学賞を受けた。安部が「メダウオア」としているのは誤記と思われる。参照されていると思われる箇所は「三、改良の限界」の次の一節である。「もう一つの多型現象の原因は、理由は何でもいいが、いわゆる「ヘテロ」の方が、ホモよりも、適合性が大きい場合である。ヘテロ」ということばで、私は特定遺伝子に関して、雑種の構成をもつ生物を指している。つまり、両親から、二つの別々の変異遺伝子を受けついで、同じものは受けなかった生物である。(略)この状態——つまり、ヘテロの方が適合性が大きいこと——

が普遍的に通用する真理とすれば、どういふことになるか考えてみよう。私がさきに『古典的』考えといつたものからでてくるものは、ほとんどみな取り消さなければなるまい。こうなると、自然淘汰は定常性と均一性に向つて進む力ではなく、この反対に、集団に対して多様であることに強いるものである。なぜならヘテロこそめづまれたもので、ヘテロは、親と同じ子を産むものではないからである。突然変異は先天的多様性をもたらずにはほど遠く、その果たす役割も非常に小さいものにならう。われわれは、最適者が集団のなかの圧倒的優勢な型として固定されるべきであるという考えを棄てなければならぬ。なぜなら、雑種の構成をもつことが、劣悪者の除去を可能にするからである。(略)ヘテロ構成の優位が何に由来するかは、近代遺伝学のなぞの一つである。ある特殊例ではヘテロがすぐれている理由がわかることもあるが、その頻度がなぜこゝも大きいのか、その一般的原因としては、一つぐらいしか考えつかない。つまり、野生の生物種は、時間的にまた場所的に変化する環境に対して打ち勝たなければならぬから、無理にでも遺伝的の不同性、すなわち先天的多様性を維持する遺伝子構成を要求するようになるのであらう。これが適応性の問題の解答の一つ——野生の生物の大部分がある程度まで必要としているものである」(強調原文)。

4 「ヘテロ精神の復権」(毎日新聞一九八六年五月一九日)。

5 安部はバヴロフ、ローレンツ、チョムスキー、ピッカートンの学説を重要視し、『死に急ぐ鯨たち』(一九八六年九月、新潮社)等において繰り返し言及している。安部と彼らの学説との関係については稿を改めて論じたい。

6 例えば『砂の女』(一九六二年六月、新潮社)における砂の村の人々や

『方舟さくら丸』(一九八四年一月、新潮社)における「もぐら」等。
7 安部公房『カンガルー・ノート』の初出は、『新潮』(一九九一年一月—七月)。初版は『カンガルー・ノート』(一九九一年一月、新潮社)。初出誌では連作として発表された。連作短編が初版各章に対応している。ただし第一回「カンガルー・ノート」のみ、初版では「I かいわれ大根」に改題されている。

8 『カンガルー・ノート』からの引用に付す(漢数字)は節番号を表している。なお、引用は初版『カンガルー・ノート』(一九九一年一月、新潮社)による。

9 有袋類は、哺乳類の進化過程における下等哺乳類として位置づけられている。ダーウィン『人類の起源』(池田次郎他訳、一九六七年九月、中央公論社)第一部第六章によれば「有袋類は、多数の重要な形質において、胎盤をもつ哺乳類の下に位置している。この類は、地質学的年代ではずっと初期に現われ、昔はその分布域も現在よりずっと広がった。だから胎盤をもつ哺乳類は、一般には胎盤をもたない哺乳類、つまり有袋類、しかも現在の有袋類と酷似した型からではなく、その初期の祖型から派生したものと考えられている」。

10 ダーウィン『種の起源』(八杉龍一訳、一九九〇年二月、岩波書店)第四章によれば「一つの土地の一般的経済においても、動物および植物がいろいろちがった生活習性のためによりひろい範囲にまたより完全な程度に多様化していればいるほど、より多数の個体がそこに生息していることができる。体制があまり多様化していない動物たちは、もつと完全に多様化した構造をもつ動物たちと、競争することが困難である。例をあげていうと、オーストラリアの有袋類は相互にわずか異なる諸類にわか

たれ、それら諸類はウォーターハウス (Waterhouse) 氏その他の人たちがいつているように、わが国の食肉類、反芻類、齧歯類などの諸哺乳類をぼんやり代表しているものであるが、それら有袋類がこれらのきわめてはつきりした諸目と競争して成功するかどうか、うたがわしい。オーストラリアの哺乳類は、発達の初期かつ不完全の段階における多様化の過程をあらわしているのである」。

11 サイド『文化と帝国主義』(大橋洋一訳、一九九八年二月、みすず書房) 第二章第三節によれば「島国としての、あるいは植民地宗主国としての境界の彼方に関する表象は、そのはじまりからすでに、ヨーロッパの権力を確証するようになっていた。ここには印象的な循環論がある。わたしたちは力(それも産業と技術と軍事とモラルの面において)があるがゆえに、また彼らには力が無いがゆえに、わたしたちは支配する、またそれゆえに彼らは支配しない、彼らは劣等である、わたしたちは優秀である……云々。この同語反復がとりわけ強靱な力をもって維持されるどころ、それは、十六世紀からすでにイギリスに定着したアイルランド観ならびにアイルランド人観である。またこの同語反復は、十八世紀全般をつうじて、オーストラリアならびにアメリカでの白人植民地に関する意見のなかでも機能した(オーストラリア人はいったって、二十世紀にはいつても劣等人種としてみられつづけたのだ)」(傍点原文)。

12 「ぼく」につけられた袋は、有袋類を連想させるものになっている。『カンガルー・ノート』第一節によれば「カンガルー・ノートはジャンプします。袋の中で暖められて……」／「お小水は、ちゃんと尿道に管をおしてありますからね……はい、大丈夫ですよ、自然に下の袋に溜りますから……」／「好きじゃないな、まるで、一度自分の中に小便して、

その小便を、また外に流しているみたいで……こんなの、好きじゃない……」。

13 この点については石崎等『カンガルー・ノート』(国文学解釈と教材の研究 一九九七年八月)に的確な指摘がある。「こうした体験を一言で「夢」と解説してしまうのは簡単である。「ぼく」の(意識のジャンプ)は(カンガルー)跳ねる(スプリングベッド)によって反復される。重要なのは、(意識のジャンプ)のたびに(こ)に暴き出される「ぼく」の無意識の領域つまり抑圧されている欲望の諸相である。これがなるとこの小説はつまらなくなってしまうだろう。看護婦とそれに関連した「下がり目の少女」Bへの欲情は最後まで持続され、「ぼく」の死によってしか終わらない。ただし、本論では別のイメージの世界への跳躍の過程を、「ぼく」の「無意識の領域つまり抑圧されている欲望の諸相」が露わになる過程としてではなく、「ぼく」に対する抑圧が新たな欲望を生み出していくという、欲望の生成の過程としてとらえようとしている。そうすることによって『カンガルー・ノート』と植民地主義の問題との接点を明らかにしようとしている。

14 柳田國男『赤子塚の話』(一九二〇年、玄文社) 第二節「塞の河原」、第一三節「石を積む風習」には、全国に散在する賽の河原と石積み風習について記されている。賽の河原は元来仏教の描く地獄にはなく、ある段階で作られたものだといふ。「日本では噴火などの怖しさに基いたものか、高山には屢此世の地獄を説いて居る。越中山に地獄ありと伝へたのは、最古の記録であるが、富士にも白山にも同じ話がある上に、北は外南部の宇曾利山から、南は九州の鶴見阿蘇雲仙等に至るまで、今あるものは多くは新しい火山である。塞河原が其一部分として存するだけ

ならば、話は至極簡単であらうが、よく注意して御覧なさい。此は割合に数多く、又広く平野地方にも分布して居る。此は塞河原が素仏教の地獄の中で無かつたこと、誰が作つたかは未知らぬが、浄土和讃の物悲しい章句に、

三つや五つの稚子が、塞の河原に集りて、昼の三時の間には、大石運びて塚に築く。夜の三時の間には、小石を拾ひて塔を積む。一つ積んでは父の為、二つ積んでは母の為……………

など、あるのは、歴史にも経文にも、些でも所拠を持たぬ創作だと云ふことを意味するもので、其が民心を動したつた今日となつては、出鱈目と否とは問題で無いか知らぬが兎に角に此和製の地獄には、やはり国産の原料が、うんと入つて居ることは認めねばならぬ」。引用は『柳田國男全集』第三卷（一九九七年二月、筑摩書房）による。

15 齊藤研一『子どもの中世史』（二〇〇三年三月、吉川弘文館）第六章によれば『富士の人穴草子』においても、賽の河原が描写されるのは地獄巡りの最初の場面ではあるが、三途の川を渡る手前であり、地獄の外側、つまり周縁部に位置するとも言える。また絵画史料では、熊野観心十界図に描かれる画面上の位置が参考にならう。賽の河原は、地獄に描かれる画面下半分に位置しながらも、六道諸世界の入口を表す六つの鳥居の内側に描かれており、その外側に描かれる地獄（四惡道）の世界とは、明らかに区別されている。地獄にあつて、地獄ではない。賽の河原は、そんな定義さえできるであらう。

16 齊藤研一『子どもの中世史』（前掲書）第六章によれば、「賽の河原の子どもの罪状は、『富士の人穴草子』によれば、親の胎内にいる間、親に苦しい思いを掛けておきながら、その恩に報いることなく夭折したこと

とされていた。つまり、子どもの現世における罪が問われているのではなく、幼くして死んだことによつて生じた罪を問われているのである。

親に孝養を尽くすことが子どもに求められていることも事実だが、賽の河原に墮ちる直接の理由は、親に先立つて幼くして死んだことにあるのだ。幼くして死ぬ責任は、（自殺でもしない限り）子ども自身にはない。このことは、賽の河原が、現世に生きる子どもに向けて発信された地獄ではないことを意味していよう。

では誰なのか。それは親であり、大人にほかならない。賽の河原は、苦患を受ける主体（子ども）と、その苦患の有り様を観る者、つまりメッセージの受け手（親・大人）が相違するという特徴を持った地獄なのである。この点は、他の地獄と大きく異なるところである。賽の河原を考える際には、そこに注がれる親（大人）の視線こそが重要な問題であると考えよう。

17 藤野豊『日本ファシズムと優性思想』（一九九八年四月、かもがわ出版）終章によれば「一九四五年八月、日本ファシズムは崩壊した。日本は連合軍、事実上はアメリカ軍の占領下に入り、非軍事化・民主化を掲げた改革が実行され、ファシズム体制を支えた諸制度は解体させられた。しかし、「国民優生法」は生き残り、その根幹となる優性思想は一九四八年、「優生保護法」へと継承された。「国民優生法」が「人的資源」としての人口の増殖を目的にして、母体の生命・健康を守る目的以外の人工妊娠中絶を禁止し、その一方で「人的資源」として利用できない遺伝性とされた病者・障害者への断種をおこなう法律であつたのに対し、「優生保護法」は、戦後の経済混乱を前に人口抑制を目的にして、人工妊娠中絶の合法化をうたつた法律であつた。この点のみを見れば両者は大きく異なる

るが、しかし、「優生保護法」もまた「国民優生法」と同様に遺伝性とされた病者・障害者への断種を、さらには人工妊娠中絶をも明記していたことを忘れてはならない。

18

ダーウイン『人類の起源』（前掲書）第二部第八章によれば、「性淘汰」というのは、もっぱら生殖に関連した面で、ある個体が同種もしくは同性の他の個体より優位にたつたということを前提としている。（略）習性の相違に関連した構造の性差が認められる場合には、雌雄の構造は自然淘汰によつて変形されたものであることは明かで、また遺伝によつてどちらか一方の同じほうの性に制限されたのである。（略）メスの構造から判断すれば、他のあらゆる点で、すべてのメスは一樣に通常の生活習性になく適応しているのである。このような場合、オスが現在もっている構造を獲得したのは、生存競争の中で生き残るのにより都合がよいということからではなく、こうした構造を身につけたために他のオスに対して優位にたつたこと、またその優位性を子どもでもオスだけに伝えることが原因となっている。だからここで性淘汰がはたらいたにちがいないのである。

このたぐいの淘汰の形式を、私がわざわざ性淘汰と呼んだのは、この点の区別が重要だからである。またもし、オスの把握器官のおもな用途が、メスのところに別のオスが到達する前に、あるいは別のオスに攻撃されたときなどに、メスに逃げられないようにすることであるとすれば、こうした器官をもつオスは自分の競争相手のオスより有利になる。したがつてこの器官は、性淘汰を通して完成されてきたのであろう。

19

日本国刑法第一七七条によれば「暴行又ハ脅迫ヲ以テ十三歳以上ノ婦女ヲ姦淫シタル者ハ強姦ノ罪ト為シ二年以上ノ有期懲役ニ処ス十三歳ニ

満タル婦女ヲ姦淫シタル者亦同シ。

20

サーカスと人さらいのイメージが結びつく過程については、阿久根蔵『サーカスの歴史』（一九七七年二月、西田書店）に次のような指摘がある。「曲馬団の子供は売られてきたものだから、身体を柔らかくするため、に酔を飲ませる、などの風聞は、昭和の初め頃まで流布されていて、今だに中年以上の人の、曲馬団⇨サーカスへの郷愁と一緒にまつていてまわっているようである。

日本のサーカスの変遷の過程で、もし子供を買ったと思われるということが、事実あつたとしても、このことはサーカスだけに限つたことではなく、前近代的な仕組みであつた時代には、種々な世界で、ままあり得たかもしれないことであろう。幼ない子供たちが、いれかわりたかわり、舞台上真剣に曲芸を演じれば、あわれさが昂じて、あらぬ噂も現実味を帯びてくるのだから。

なかには、實際食うに困まる一家が、一人前になつたらその技で生活できると、口べらしとして、サーカスに年期奉公に出される子供もいた。男の子なら兵隊検査までが年期奉公で、世話人がいたとも聞く。年期があれば自由意志で、そのままサーカスに残る者や、故郷へ帰る者、他の職業につく者などいろいろであつたが、世間へ飛びだしても、再び古果にまいもどり、習い覚えて身についた技で、結局サーカスに落ち着く者が多かつた。（略）現在中年以上の多くの人は、幼い頃「悪い子は曲馬団に売つてしまふぞ」といつた文句で、親に叱られた経験があるだろう。子供いたずらをたしなめる教訓として、世の親たちは単純に使つていたものである。

また、藤原英了『サーカス研究』（一九八四年三月、新宿書房）によれ

ば「その時分は今と違いました、我々は夜遅くまで遊んでいてなかなかウチに帰らないでしょ。そうすると、人さらいにさらわれるっつていわれたんです。さらわれたら、サーカスに売られちゃうっつてね。」我々は、昔はサーカスをやっている人はみんな、人さらいにさらわれた人だと思

っていました。（略）なんともいえない物悲しさ。さらわれて、ああいうふうになっちゃったという……」。

（筑紫女学園中学・高等学校教諭）